2020 年度秋学期「教員アンケート」の結果について

流通経済大学　FD 委員会

目次

[要約] 1

１．回答者とその内訳 3

２．学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか 6

３．学生の集中や理解を促す取り組みとそれらについての自己評価 8

４．講義科目の成績評価方法とそれらについての自己評価 11

５．学生アンケートの結果を踏まえた改善計画 13

６．特別な配慮が必要な学生への対応 14

７．対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案 15

８．学生アンケートに関する要望 17

[要約]

１．回答者とその内訳

・2020 年度秋学期の教員アンケートには、107 名が回答した。内訳は、専任教員 71 名、非常勤講師 36 名であった。残念ながら、すべての学部をつうじた回答者総数は、前年度の秋学期と比べても、本年度の春学期と比べても、大きく減少した。秋学期の回答者数は、春学期と比べて少なくなる傾向があり、回答率を上げる何らかの工夫が必要である。

２．学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか

・「学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか」という質問には、回答者総数の 80.4%（86 名）が、「とても役立っている」あるいは「概ね役立っている」と回答した。

・役立っていると回答した理由としては、「学生の関心・ニーズ・要望を把握できる」、「学生の理解度を把握できる」、「自身の取り組みに対する学生の評価を把握できる」等が挙げられていた。ほとんどの授業がオンライン化されていた今学期は、直接的に学生とコミュニケーションをとる機会が限られていたため、学生アンケートの回答が授業改善にとって大変有益であったと回答した教員が多かった。

・役立っていないと回答した理由としては、学生の回答の信頼性に関するものが多かった。「少数の学生の回答しか得られていない」、「脱落した者の回答が得られていない」等である。また、求めていた情報が得られなかったことを理由とする者もいた。「より有益な情報を独自に行っているアンケートから得た」、「コピー＆ペーストで回答していると思われる者がいる」等の意見があった。

３．学生の集中や理解を促す取り組みとそれらについての自己評価

・学生の集中や理解を促す取り組みについては、今学期ほとんどの授業がオンラインで実施されたため、前学期と同様にオンライン授業に固有な工夫を挙げる教員が多かった。「資料・教材や授業の内容・方法・進度をオンライン授業にあわせて見直した」、「manaba で毎回あるいは頻繁に課題を出した」、「迅速かつ丁寧にフィードバックするよう心掛けた」、「オリジナルの動画ファイルや音声ファイルを作成し公開した」、「オンライン会議アプリを利用して授業をライブ配信した」等である。また、取り組みの自己評価については、概ねうまく機能したと回答した教員が多かった。

４．講義科目の成績評価方法とそれらについての自己評価

・講義科目の成績評価方法については、授業期間中に出した課題のみにもとづいて評価した者（72 件）が最も多かった。授業期間中の課題に加えて期末レポートを課した者（19 件）、授業期間中の課題に加えて期末テストを課した者（7 件）がそれに続く。また、評価方法が、概ねうまく機能したと回答する教員が多かった。ただし、オンライン試験における不正行為の検出が難しいことや、例年に比べて評価が甘くなったことを難点として挙げた者もいた。

５．学生アンケートの結果を踏まえた改善計画

・学生アンケートの結果を踏まえた改善計画については、教員と学生のコミュニケーションや学生同士のコミュニケーションに関する方策を挙げる教員が多かった。「毎回あるいは頻繁に出す課題の最後に、学生が意見や感想を記入できる欄を設ける」、「manaba の掲示板や E メールを積極的に用いる」、「授業時間以外にライブ配信のオフィスアワーを設ける」等の方策が挙げられていた。

６．特別な配慮が必要な学生への対応

・特別な配慮が必要な学生への対応としては、「課題の提出締切を延長した」、「（留学生のために）ふりがなをふった教材を作成した」、「（留学生のために）同じ意味の、より簡単な表現を用いるように心がけた」、「E メールや電話で個別に連絡をとり、学生を励ました」、「関連部署（国際交流課や教育学習支援センター）の協力を求めた」という回答が挙げられていた。

７．対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案

・オンライン授業を対面授業の教育効果や本学の魅力を高めるために活用する方法については、以下のような提案があった。オンライン授業で用いられた各種のツールは、学習支援・個別指導・反転授業・グループワーク・情報の取得や共有を容易化することができ、対面授業の教育効果を高める効果が期待できる。オンライン授業では、時間的・空間的な制約が緩和・解消され、より自由な授業計画が可能になる。また、授業を録画した動画をホームページで公開すれば、潜在的な入学志願者に対して訴える手段になり、本学の魅力を高める効果が期待できる。

８．学生アンケートに関する要望

・学生アンケートについての教員からの要望としては、アンケートを実施する時期の見直し、回答者数を増やす策の検討など、アンケートの実施方法に関する要望が多かった。また、アンケートの集計・報告方法についても、いくつかの要望があった。

以上

1．回答者とその内訳

●学部別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
経済学部	35	41	25	↓	↓
社会学部	34	38	34	→	↓
流通情報学部	19	24	17	↓	↓
法学部	20	21	15	↓	↓
スポーツ健康学部	19	22	16	↓	↓
不明	1	3	0	↓	↓
合計	128	149	107	↓	↓

●身分別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
専任	74	92	71	↓	↓
非常勤	54	56	36	↓	↓
不明	0	1	0	→	↓

●専任教員の回答者数（学部別）

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
経済学部	20	24	17	↓	↓
社会学部	18	19	18	→	↓
流通情報学部	12	17	13	↑	↓
法学部	9	13	9	→	↓
スポーツ健康学部	15	18	14	↓	↓
不明	0	1	0	→	↓
合計	74	92	71	↓	↓

●専任教員の回答率（学部別）

	専任教員の数	回答者の数	回答率
経済学部	39	17	43.6%
社会学部	35	18	51.4%
流通情報学部	22	13	59.1%
法学部	27	9	33.3%
スポーツ健康学部	38	14	36.8%
	161	71	44.1%

●非常勤講師の回答者数（学部別）

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
経済学部	15	17	8	↓	↓
社会学部	16	18	16	→	↓
流通情報学部	7	7	4	↓	↓
法学部	11	8	6	↓	↓
スポーツ健康学部	4	4	2	↓	↓
不明	1	2	0	↓	↓
合計	54	56	36	↓	↓

●科目区分別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
専門科目	75	84	63	↓	↓
教養科目	53	65	44	↓	↓

●経験年数別の回答者数

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
1年未満	21	18	11	↓	↓
1年以上3年未満	19	31	22	↓	↓
3年以上	87	99	73	↓	↓
不明	0	0	1	↑	↑

●ひとりの教員が担当している科目の数

（1）講義科目

0科目	14	13.1%
1科目	15	14.0%
2科目	29	27.1%
3科目	15	14.0%
4科目以上	32	29.9%
不明	2	1.9%

（2)演習（ゼミ）

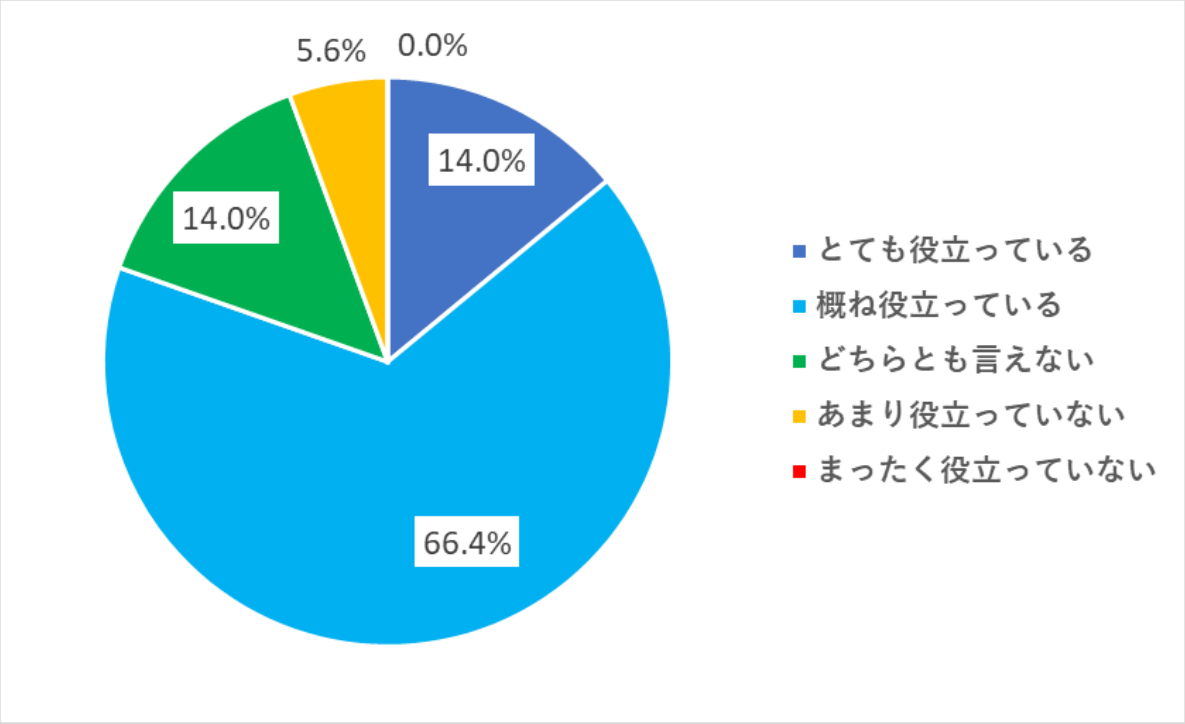
0科目	33	30.8%
1科目	17	15.9%
2科目	21	19.6%
3科目	20	18.7%
4科目以上	14	13.1%
不明	2	1.9%

（3）その他（語学、体育実技、コンピューター、教職）

0科目	53	49.5%
1科目	8	7.5%
2科目	13	12.1%
3科目	4	3.7%
4科目以上	18	16.8%
不明	11	10.3%

2．学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか

	2019年・秋	2020年・春	2020年・秋	前年度秋学期からの増減	同年度春学期からの増減
とても役立っている	28	29	15	↓	↓
概ね役立っている	61	94	71	↑	↓
どちらとも言えない	30	23	15	↓	↓
あまり役立っていない	8	3	6	↓	↑
まったく役立っていない	0	0	0	→	→
不明	1	0	0	↓	→
合計	128	149	107	↓	↓



（1）役立っていると思う理由（主なもの）

●学生の関心、ニーズ、要望を把握できる

・自由記述の回答において、具体的に問題点を指摘してくれる学生がいて役に立った。

・予習・復習の時間が少ないため、意欲のある者が取り組める課題をもう少し増やす必要があったと気づくことができた。

・オンライン講義について肯定的な意見が意外に多いことが分かった。また、講義資料に口頭での説明が欲しいという要望があることが分かった。

●学生の理解度を把握できる

・オンライン授業であるため、学生の様子がつかめない部分があったが、概ね理解されていることが確認できて安心した。

・自由記述に、具体的な例を挙げて、どの部分が理解しやすく、どの部分が難しかったかが書かれているので、今後に向けての対策を考えるうえで役立つ。
・学生たちの理解度がわかり、次年度の教材に活かすことができる。

●自身の取り組みに対する学生の評価を把握できる
・「とてもモチベーションがあがった」、「質問をとりあげて授業でフィードバックしてもらって嬉しかった」など、自分が努力したことを学生に評価してもらえたことが分かって良かった。
・思ったよりも評価が高かったクラスと低かったクラスがあり、学生の感じ方と教師の感じ方に不一致があることに気づけた。
・匿名のアンケートであるからこそ、授業時には聞くことのできない学生の率直な声が反映されていると思う。また、返却いただいた集計票については、レーダーチャートなどがあり、視覚的にも理解しやすいと感じている。
・今回の専門科目のアンケートには驚いた。例年と比べて授業アンケートの回答率もコメントを書く率が非常に高く、多くの感想やメッセージを見ることができたからである。学生がmanabaを使った学習に慣れたため、アンケートに対する抵抗感がなくなったのではないか。

（2）役立っていないと思う理由（主なもの）

●回答の信頼性に問題がある
・回答してくれていたのは、積極的に授業に参加していた生徒だと思われる。回答してくれなかった学生の声が授業改善のためには必要だと思う。
・今回のアンケートの回答率は低く、授業についていけなかった学生や、授業を放棄した学生の意見は反映されていない。
・再履修のクラスでは、回答者があまりにも少なく参考にならなかった。
・アンケートに回答した者の数が極めて少なく、一部の回答結果に科目平均が引っ張られるという傾向が明確に出ていた。
・当該科目には当てはまらず、他の科目に関する回答をコピー＆ペーストしているのではないかと思われるものがあった。

●求めていた情報が得られなかった
・様々な形態の授業がある中で、一律の質問項目で評価することの限界を感じる。
・役に立ってはいるが、当たり障りのない意見がほとんどであった。
・偏った意見が散見され、判断に苦慮することがたびたびある。
・普段よりゼミの学生とよく会話しており、個々の意見をすでに把握できている。

３．学生の集中や理解を促す取り組みと、それらの取り組みの成果についての自己評価

●オンライン化にともなう内容・進度・資料などの見直し

・対面授業では口頭だけで説明している内容まで、講義資料に書き込んだ（法）。

・manaba のアンケートの中に、15 分程度の動画と資料をいくつかアップロードした。それらの動画や資料の下に質問を掲げ回答欄を設けて、学生に埋めてもらうようにした（社会）。

・講義科目の授業をライブ配信で行った。途中で理解度を確認するために、小テストを挟んだ。穴埋め問題を基本とし、チャットを利用して、5~10 分で回答を打ち込んでもらい、その後に答えを確認した。正解が 3 名出たところで、次の穴埋め問題に進む、というふうに進めた（流通）。

・「オンデマンド 2 回＋オンライン 1 回」のサイクルを 5 度繰り返すことで、学生のペースで課題に集中して取り組めるようにするとともに、教員と学生、そして学生同士がコミュニケーションできるように努めた（スポ健）。

●宿題を毎回あるいは頻繁に出す

・以前は不定期に行っていた小テストを毎回実施するようにした。例年よりも受験率が高かったように感じる（経済）。

・事前学習として小テストを課した。対面授業のときよりも受験率が上がり、学生の理解を助けたと思う（社会）。

・毎回、manaba の小テストとアンケートを利用した課題を出した。講義資料で前回のフィードバックと解説および今回の学習の進め方やポイントなどを細かく指示し、積み重ねの学習と継続的な課題提出の重要性を伝えてきた。掲示板やメールを通して、個々の学生の質問に答えられるように努めた。大多数の受講生に関しては、一応の成果を上げているように感じる（社会）。

・毎回、小テストを実施したり、レポートの提出を求めたりした。レポートに関しては、対面であれば発言しないような学生からもいろいろな意見が寄せられたし、学生の「書くスキル」に際立った進歩がみられた（社会）。

●迅速かつ丁寧にフィードバックする

・毎週レポートの提出を求め、それを添削し、質問への回答を行った（法）。

・コミュニケーションに難があるオンラインでの授業だったので、manaba のコメントや掲示版、E メールなどを活用し、なるべく双方向となるように努力した（スポ健）。

●オリジナルの動画・音声ファイルの作成

・パワポに音声を入れて、15 分以内のファイルを 2 本というスタイルで進めるようにした。講義自体は 30 分以内におさめ、manaba の小テスト、ドリル、アンケート、レポートから毎回 2 つほどを組み合わせて、講義内容をしっかり理解し定着させるように工夫した。
学生の反応は概ね良好だったように思う（社会）。

・教科書に添付されている CD に収録されていない語や私が作成した例文の音声を、フランスのサイトで提供されている人工音声を使って作成し添付した（社会)。
・ライブ配信で授業を行うとともに、2~3 日以内にその動画を公開することで、通信障害などでリアルタイムの授業に出席できなかった学生に配慮した（流通)。
・語学の授業で、パワーポイントに解説の音声を入れ、動画として見られるようにした。学生からは繰り返し見ることができ、理解が深まったというコメントがあった（スポ健)。

●既存の動画・音声ファイルの紹介
・折に触れて、テキストから離れビデオを視聴してもらい、教室の中で学ぶ英語ではなく、実際にネイティブの話す英語に耳を傾け、英語圏の国の文化や習慣などにも触れてもらった。英語圏の国に対する学生の理解や関心が高まり、学習に対する意欲が少しは沸いたのではないかと感じている（経済)。

●授業のライブ配信の実施
・meet のチャット機能を使って、学生に発言させるようにしている（スポ健)。
・オンライン授業ではコミュニケーションが取りにくいという感想を、多くの学生が持っていた。特に、1 年生の留学生からはオンデマンド方式だけで大学で学んでいる実感がないという声があった。リアルタイム(ライブ配信)方式で授業を実施し、学生になるべく話し掛けるようにした。教科書の内容に即した専門的な Q&A が難しそうな場合には、体調やネット環境など身近な話題で尋ねた。それによって、大方の学生は決まった時間に繋がることで安心し、生活のリズムを整えてもいたようだ。リアルタイム方式はネット環境や受講生の疲労度を考慮して 60~70 分程度の参加で退出可能とし、その後は任意で参加する質問タイムとした（社会)。
・C-Learning を使用して、受講生の回答を共有しながら授業を進行した。他の受講生の回答をみながら、課題に取り組むことで、講義内容の理解に役立ったと考えている（流通)。

●グループワーク、ディスカッション、学生間のコミュニケーションのファシリテーション
・レクチャー（講義）の後に、グループディスカッションあるいはグループワークの時間を設け、学生が主体的に取り組むように心掛けた。対面授業においては上手くいったと感じるが、オンラインのゼミ(演習)では苦戦する時もあった。ZOOM のブレイクアウトルームを使ってディスカッションやグループワークを行うのだが、議論を進めることができないグループもある。そのような場合、対面でないので指導がしづらい。学生も毎回、ブレイクアウトルームを使ってのディスカッションやグループワークだと飽きが来るようだ（経済)。
・学生同士が交流できる時間を作るようにした。「クラスメートと話せて楽しかった」と言ってくれた学生が多くいた（法)。
・ライブ配信の授業では、学生同士の対話や意見交換を積極的に行なった。毎回の授業の後に行ったアンケートでは、好意的な回答が多かった（スポ健)。

・小テストの最後に自由記述欄をもうけて、感想や質問などを、自由に意見を書いてもらった。翌週に自由記述の何例かをまとめて資料として添付した。また、コメントを寄せた学生一人一人に、記述に応じて、感想や追加情報を書き込むなど、コメントを返した。「とても楽しい授業だった」、「他の学生がどんなことを考えているのか分かって嬉しかった」、「とても視野が広がる授業だった」などと評価していて、良い試みだったのが確認できた（社会）。

●学習支援アプリやサービスの利用

・グループワークでは、miro（ホワイトボードアプリ）とブレイクアウト・セッションを組み合せて、うまく対応ができた（流通）。

●ライブ配信以外の手段によるコミュニケーション双方向性の確保

・外国語の授業で、学生に毎週音声を吹き込んだファイルを提出してもらった。文章の読みと言葉の使い方については、ドリルなどを通して学習成果を確認した。それに加えて、YouTube やウェブサイトを補充教材として紹介した。また、メールで、できなかったところをサポートした（法）。

●現実の事例や視聴覚資料の利用

・学生に参考として見て欲しい web 情報(企業や官公庁の HP)の URL を資料に貼り付けた（法）。

・現場の映像を取り入れた、できるだけ端的な資料を作成した（スポ健）。

●ルールづくりへの参加

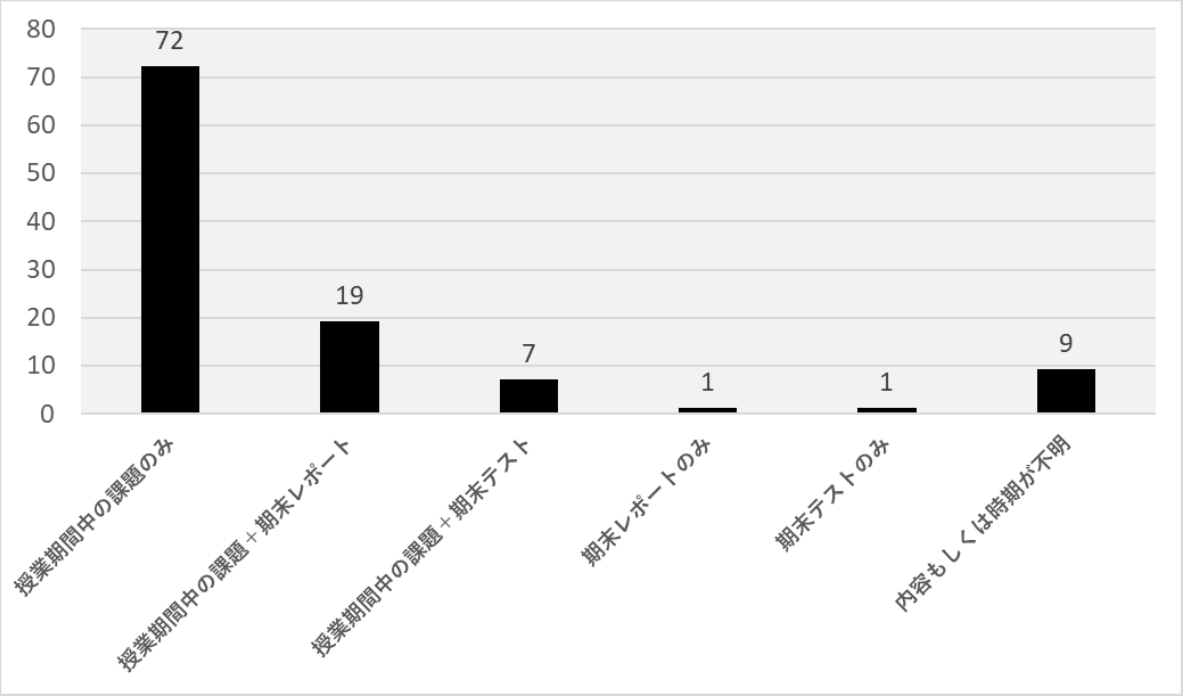
・スポーツコミュニケーション実習では、オンライン授業をクラス全員が快適に受けるためのルールを、学生たちに作らせた。教員から与えられたルールではなく、自分たちで作ったルールということで、みな積極的に実行してくれた。授業中に受講態度について、こちらが注意することはなかった（スポ健）。

●外部講師の招聘

・海外からの社会人講師をお呼びしたが、これは対面では不可能であった。社会人講師の授業のみライブ配信にして、チャットでの質問を受け付けるようにした（経済）。

４．講義科目の成績評価方法とそれらについての自己評価

（1）成績評価のための主な資料



●授業期間中の課題のみ

・主に manaba の小テストの合計得点を資料として、成績の評価をした。小テストがまったくできない学生もいたので、適宜レポート課題を提示したりして、対応を変えることもあった（経済）。

・小テストの点数の合計を提出回数(出席回数)で割った平均点で評価した（社会）。

・授業期間中に、小テストやレポートを課した。オンライン授業に出席しないと高い点数が取れないので、対面授業に比べて出席率が格段に上がった。特に、龍ケ崎の重点部の学生たちに顕著に見られた変化だった。以上の点で、この成績評価の方法は、うまく機能したと思う（法）。

・毎回の課題にもとづき評価した。提出期間が 1 週間あったので、提出率が高く、累計すると平均的に高得点となった。例年と比較すると、成績の良好な者が多くなった（法）。

・基本的には毎回の提出物で 8～9 割の評価を行い、残りの 1～2 割はやる気がある学生が取り組める課題を与えた（スポ健）。

・平常点にもとづいて評価したが、定期テストがなかったために、総合的な理解度の確認は難しかった（スポ健）。

●授業期間中の課題＋期末レポート

・筆記試験を行いたかったが、システム上、公正さを保てない（不正行為の検出が難しい）と考えたので、全体のまとめのレポートを課した。また、毎回の課題の質、出席状況なども含めて評価した。この評価方法はほぼうまく機能したと思う（社会)。

・定期試験代わりに課題レポートの作成・提出を求め、小テストの合計点にレポートの評価点を加え、最終的な評価を行った（法)。

●授業期間中の課題＋期末テスト

・主に期末試験の結果で成績評価した。講義内で小テストを行っているが、重みづけを10%程度に抑えている。この科目を選んだのは学生自身であり、授業に出席すること、主体的に学習することは当たりまえのことだからである（経済)。

・授業期間中の課題・宿題が 40%、持ち込み可の試験が 60%の重みづけで評価した（経済)。

●期末テストのみ

・少人数のクラスの場合は、授業中に通常の試験を実施した。試験を受けている様子をPC やスマホのカメラで写し、不正がないか確認して、答案を写真でとって送らせた（社会)。

（2）先進的な評価手法の採用

・課題出題時に、採点基準の項目と得点を明示したルーブリックを添えた。内容面だけでなく、形式面も含めて 9 項目を設けた。採点基準が明瞭なため、評価に関してはスムーズにできた。しかし、全体的に、想定以上に高い評価になってしまった（社会)。

・授業の採点基準を学生に明示し、点数も開示する。採点基準を明示することで、レポート作成に対する意識も高められる（流通)。

５．学生アンケートの結果を踏まえた改善計画

・グループワークが機能するために、ある程度、教師がグループのメンバーを決める必要があると考えている。どのようにメンバーを組み合わせるか、また課題にどう取り組ませるか、どのように興味を喚起するかを考え中である（流通）。

・動画ファイルを提供しているが、一部の学生は PDF 資料のみを見て、小テストに回答しているようだ。動画を使っての学習が進まないと懸念し、動画を見ないと高得点を取れないような内容の小テストにした。今後は、それを続けるとともに、動画視聴を促すアナウンスを学生にしていくつもりである（経済）。

・オンデマンド授業では、定期的にライブチャット形式の質疑応答タイムを設け、学生とのコミュニケーションの強化を図る必要がある（法）。

・担当しているひとつの授業で最後に「自己評価」を導入し、学生の内省を促すことができた。もうひとつの授業でも同じことをしてみようと思う（社会）。

・不正行為をする学生の対応に注意が削がれ、大多数のまじめに取り組んでいる学生への正当な対応が疎かになってしまった。オンラインでの授業は、不正行為の対応には限界がある。したがって、これ以上の改善は見込めないと思う（スポ健）。

・レポート課題に対するコメントを充実させることで、学習意欲の向上や学生達とのコミュニケーションの強化につなげていきたい（経済）。

・動画の挿入など、視覚に訴える教材をさらに増やしていきたい（流通）。

・TA 制度を導入し、上級生もディスカッションに入るようにしたい（経済）。

・外国語科目で、学生同士が話をできる機会を増やしたい。オンライン会議アプリのブレイクアウト・セッションを活用したり、Flipgrid による学生のインタラクションの機会を増やすつもりだ（経済）。

・もしオンライン授業が続くのであれば、まず学生のインターネット接続環境を整えてからにしてほしい。その上で、時間を区切ったり、グループを分けてディスカッションさせたりして、学生のコミットメントを高めたい（社会）。

・講義科目で、リアルタイムに C-Learning を使用し、受講生全員の回答を共有しながら、全員の理解度を引き上げる授業を行いたい（流通）。

・小テストに質問欄を設け、学生とのコミュニケーションを図る手段としたい（経済）。

・簿記の科目を担当しているが、検定試験がネット試験になった。この機会に、manaba の小テスト機能を対面授業でも積極的に活用したい（経済）。

・オンデマンド授業では質問をしにくいという声が多かったので、オンラインでも直接質問できる時間を設けるなどの工夫をした（スポ健）。

・ゼミでのグループワークにおいて、オンラインホワイトボードを活用したワークを実施する（流通）。

・これまではレジュメと資料を印刷して、教室で配布していた。来年度は manaba にファイルをアップロードし、事前配布することを検討している。また、リアクションペーパーについても、紙に記入してもらい、回収していたが、manaba に入力してもらうことを検討している（社会）。

６．特別な配慮が必要な学生への対応

（1）身体的あるいは精神的な障害のある学生への対応

・聴覚障害の学生に配慮して、UD トークなどの音声認識ソフトで文字起こしがしやすいように、なるべく一文を短くしたり、言い直しをしないようにしたりした（経済）。

・心の病を抱えているように思われる学生がゼミに一人いた。その学生には、対面授業に戻ってからも、オンラインでの出席を認めた。結果として、その学生は、オンラインできちんとプレゼンテーションをしてくれた（流通）。

（2）極端に消極的な学生やモチベーションが低い学生への対応

・欠席が多く消極的な学生には、個人宛に E メールを送り、出席するように喚起した。それで再び出席するようになった学生もいるが、(特に再履修のクラスにおいては、) 戻ってこない学生が多くいた（社会）。

・欠席が多い学生や、設問とはまったく無関係の解答を提出し続けている学生等に対して、個人あての連絡を含め、様々な方法で注意を促した。確認のために E メールの返信を求めたが、連絡のないことがほとんどだった。オンライン授業では、学生の様子や真意が分からず、難しさを感じた（社会）。

・毎回の講義で課していた小テストの点数が非常に悪かった学生に対しては、E メールを送り、ライブ配信で行う解説授業に参加するように促した。この授業に参加した学生の小テストの得点の向上と単位の取得につながった（法）。

（3）留学生への対応

・日本語能力の低い留学生については、個別に時間を取り指導した。また、ピアサポートとして、同級生にも協力してもらった（スポ健）。

・留学生の中に日本に入国できない者がおり、その学生が毎回小テストの提出ができているか、注意を払った（経済）。

・日本語のやり取りが苦手な留学生には、ひらがなで連絡したり、場合によっては Google 翻訳を活用したりした。こちらの伝えようとする気持ちが伝わったのか、返事が来やすくなった気がした（スポ健）。

・動画においても配布資料においても、分かりやすい日本語を用いることを意識した（流通）。

・途中で中国に帰国した学生が manaba にログインできなくなり、国際交流課にも相談したが、結局学生は期末レポートを出せず、留年することになりそうだ（社会）。

・日本語の文章読解能力の低い留学生への対応は、オンラインでは難しいと感じた。分かりやすい説明・解説を心がけたが、manaba でする文章による指示だけでは、文章読解能力が低い学生への対応には限界があると感じた（スポ健）。

・留学生のレポートは、コピー＆ペーストが多かったように思う。見つけ次第、注意を促した（経済）。

７．対面授業の教育効果や本学の魅力を高める活用方法の提案

（1）対面授業の教育効果を高める手段として[1]

●教育と学習の支援

・manaba を利用した小テストの実施やレポート課題の提出は、採点や成績管理をする上でとても便利である。

・リメディアル教育（大学教育を受けるために必要な基礎学力を補うために行われる補習教育）に、オンライン授業を用いてはどうだろうか。

・「オンライン授業だから出席し続けることができた」、「対面だとキャンパスに来なければならず、それがわずらわしくて授業に出なくなる」という学生は、けっこういる。オンラインだからこそ進級できた、オンラインだからこそ卒業に必要な単位数を取得できた、という学生も一定数いるだろう。「なにがなんでも対面でなきゃダメ」という近視眼的な意見に固執することなく、スマートに対応していくべきだと思う。

●個別指導

・manaba のアンケート機能を利用すれば、コメント機能を用いて 1 対 1 のコミュニケーションができる。人前では質問できない学生も、これを利用すれば、気軽に質問できると思う。

・課題を出したら、毎回評価やコメントを早く返すように努めたが、「嬉しかった、励みになった」という学生からの意見があった。

●反転授業

・manaba などを活用して反転授業ができれば、効果的であるように感じた。特に、実習の授業では、その効果が発揮されるのではないか。

・パワーポイントによる解説を予習に用いて、授業当日は予習で得た知識を実践する時間に当てる。いわゆる反転授業が教育効果を高める。

●グループワーク

・Remo というオンライン会議アプリは、グループディスカッションに活用でき、対面授業を補完できると感じた。

・Flipgrid を使えば、学生同士がお互いの録画したビデオを見て、それに対する応答の仕方を練習できる。外国語のクラスだけでなく、学生同士のコミュニケーションが必要なクラスに適している。

---

[1] 本文では、オンライン授業に対する肯定的な意見のみを取り上げたが、慎重な意見や否定的な意見ももちろんあった。例えば、「まず前提として、学生が所有するデバイスや利用できる通信環境の充実が必要である」、「音声トラブルや接続トラブルが多いのが問題だ」、「オンライン講義は何ら教育的効果を高めるところはないし、逆に萎ませるものだと思っている」等の意見があった。

●情報の取得や共有の容易化
・これまで紙で行っていたリフレクションカードを manaba で置き換えられると思う。

●時間的・空間的な制約の緩和・解消
・オンライン授業の場合、専門家をゲスト講師として招聘しやすい。また、受講する学生数の制限もない。魅力的な外部講師を積極的に招聘し、リアルタイム配信あるいはオンデマンド配信で特別講義を行うことで、学生も刺激を受け、また対外的にも大学の魅力としてアピールできるのではないかと思う。
・ZOOM などで、社会で活躍する OBOG と話す機会を増やす。海外ともつながるとよい。
・オンデマンドは今後も活用すべきとだ。特に、大会や合宿などが多い、スポーツ健康科学部には有用だと思う。
・動画や音声を自由な時間に見たり聴いたりできることが、オンデマンド方式の大きな魅力である。個人的には、大教室の講義は、全てオンデマンドに切り替えてしまってもよいのではないかとさえ感じている。
・今学期は、月に 1 回、WebexMeeting(音声のみ)を用いて、授業日の昼休みに 30 分程度のオフィスアワーを実施した。毎回の授業の質問は manaba で受け付けて適宜回答しているが、直接教員と話したいという要望があったためである。実際に活用した学生はごく少数だったが、アンケート結果によると、実施すること自体に安心を感じてもらえたようだ。

●より自由な授業計画
・対面授業を原則としつつも、出張・公務などによる休講に代えて、オンライン授業を効果的に併用することが考えられる。

（2）その他の手段として
・課外の日本語能力試験対策講座などをオンラインでやり、参加できない学生も、都合の良い時に動画を見ることができれば良いのではないか。
・心の病など問題を抱えていて欠席しがちな学生には、オンラインでの参加を認めれば、出席率が向上し、問題の解決になると思う。

（3）本学の魅力を高める手段として
・オンライン授業の動画については、Web オープンキャンパスなどに活用できるのではないだろうか。

８．学生アンケートに関する要望

（1）内容や実施方法に関する要望

・アンケートの質問は日本語だけでなく、英訳も付けてほしい。
・対面授業ではなかったため、「学生の私語を教員が注意していたか」という質問は意味がなかったのではないか。
・「通常の対面での授業と今回のような Web 授業を比べて、その良い点、悪い点について書いてください」という設問は変えた方が良い。この聞き方だと、当該授業について答えるのか、オンライン授業全体について答えるのかが判然としない。
・学期末だけではなく、授業開始後 6 回目くらいにでも、アンケートを実施してはどうだろうか。そして、その回答を授業に反映させて、学期末のアンケートで、学生の要望に応えられたかを確認する。学期末に行うのでは、その学期の授業の改善には役に立たない。
・質問の数をもう少し絞り込んでみたら、回答率が上がるのではないか。
・授業アンケートに回答してほしいと教員が案内すると学生が忖度する部分は否めないし、案内しないと回答率が下がるというジレンマがある。アンケート回答を必須にする、良いアイデアがないだろうか。
・担当する科目については、幸い好意的な評価が多かったのだが、学生が匿名性に疑問を抱いている可能性がある。彼らの本当の意見を聞くことができていないように感じる。匿名性が保証されていることを学生に確信させる方法について検討する必要がある。
・Ring で学生にアナウンスするだけでなく、回答数を増やすために工夫をしていただきたい。例えば、未回答の学生に対して連絡をするなど。

（2）集計や報告方法に関する要望

・学生アンケートの「自由記述」を収めたファイルに、もっと簡単にたどり着けるようにしていただきたい。

以上